●誕生～学生時代

西暦	年号	年齢	できごと
1873	明治6	0歳	12月22日 福島県安達郡二本松町根崎下ノ町（現在の二本松市）に生まれる。父は朝河正澄（旧二本松藩士）、母はウタ（旧田野口藩士 松浦竹之進長女）、義祖母ヤソ、異父姉 イク（当時12歳）、同キミ（当時11歳）。
1874	明治7	1歳	7月25日 伊達郡立子山村小学校（現在の福島市立立子山小学校）が開設され、父正澄は校長格として赴任する。 8月7日 両親及びキミと共に立子山村に移り住み、天正寺庫裡を住居とした。 8月25日 天正寺本堂を仮教室として立子山小学校が開校される。
1875	明治8	2歳	
1876	明治9	3歳	1月19日 母ウタが死去し、二本松市真行寺に埋葬される。この頃義祖母ヤソ及び義姉イクが二本松を引き払って立子山に移った。 7月30日 同小学校新校舎が落成し、開校式が挙行される。
1877	明治10	4歳	**2月 西南戦争（～10月）** 6月 同小学校校舎が総二階に改造され、二階の1部が教員住宅用なり、一家は天正寺庫裡から移る。この頃天正寺本堂の表白壁に走馬数頭を落書きしたが、住職に運筆の妙を称えられ現在に至るまでそのまま保存されている。以後、渡米までの期間ここが生活の本拠となる。父が後妻エヒ（伊達郡梁川町神宮 関根備の妹）を迎える。
1878	明治11	5歳	
1879	明治12	6歳	4月 立子山小学校 初等科に入学する。
1880	明治13	7歳	
1881	明治14	8歳	
1882	明治15	9歳	5月30日 初等科を卒業し、中等小学6級に編入される。
1883	明治16	10歳	
1884	明治17	11歳	
1885	明治18	12歳	4月1日 中等小学を卒業し、高等小学4級に編入される。 12月3日 高等小学4級を修了した。
1886	明治19	13歳	この年、立子山高等小学校 3級を修了し、川俣高等小学校（現在の伊達郡川俣町立川俣小学校）に転校する。
1887	明治20	14歳	3月24日 編入試験に及第し高等小学の課程を卒業する。 4月11日 父の薦める師範学校への進学を好まず、福島県尋常中学校に入学する。
1888	明治21	15歳	**7月 磐梯山噴火**
1889	明治22	16歳	**2月 大日本帝国憲法発布** 3月26日 同中学校が福島から桑野村（現在の郡山市）に移転したので、開成山大神宮神官 宮本安雄方に下宿し、卒業まで通学した。同校はのちに安積中学校（現在の福島県立安積高等学校）と改称する。
1890	明治23	17歳	4月1日 英語教師英人 トーマス・エドワード・ハリファックスが同中学校に着任、その教えを受ける。
1891	明治24	18歳	中学機関誌『扶桑の花』第8・9号に「記憶」と題する翻訳文を投稿、掲載される。
1892	明治25	19歳	3月24日 同中学校第4回首席卒業、英語で卒業生総代としての答辞を述べる。 5-8月 郡山町の郡山尋常小学校（現在の郡山市立金透小学校）の代用教員（英語教授の嘱託）を勤める。 9月 上京して東京専門学校（早稲田大学の前身）文学部に入学する。 11月 母校英語教師ハリファックスの留任嘆願書を福島県議会に送る。在学中下宿先は牛込、神田などを転々とする。

1893	明治26	20歳	6月2日 本郷教会において横井時雄により洗礼をうけ、キリスト教徒となる。
1894	明治27	21歳	2月 米国ダートマス大学学長タッカーが朝河の同大学留学の際の授業料と寄宿舎費の免除を横井時雄に約束する。 **8月 日清戦争勃発（～1895）** 秋頃 渡航費の準備を心掛ける。
1895	明治28	22歳	7月20日 東京専門学校を首席で卒業する。在学中に大西祝・坪内逍遥・夏目漱石等の教えを受け、同級生に網島梁川・五十嵐力ら 9月4日 義祖母ヤソが死去し、立子山村天正寺に埋葬される。 12月7日 横浜港より出航し米国に向かう。大西祝・大隈重信・徳富蘇峰・勝海舟・渡辺弥七らが彼の渡航費を援助する。
1896	明治29	23歳	正月 ニューハンプシャー州ハノーヴァーに着き、ダートマス大学の1年に編入される。
1897	明治30	24歳	
1898	明治31	25歳	6月『国民の友』に「日本の対外方針」を発表する。
1899	明治32	26歳	6月 ダートマス大学を卒業。 9月 コネチカット州ニューヘイブン市にあるイェール大学大学院歴史学科に入学する。この後タッカーの援助のもとにイェール大学の給費生として大学院課程を修める。
1900	明治33	27歳	
1901	明治34	28歳	
1902	明治35	29歳	**1月 日英同盟締結** 6月16日 イェール大学院の課程を修了し、学位論文『The Early Institutional Life of Japan:A Study in the Reform of 645 A.D.』により博士号（Ph・D）を授与され、総長ハドレーよりその出版費の補助を受ける。 9月 母校ダートマス大学講師となり東西交渉史などを講義する。
1903	明治36	30歳	『日本初期の社会制度-大化改新の研究』（英文）を東京で出版する。 7月23日 継母エヒが死亡し、立子山天正寺に埋葬される。 10月 父が立子山小学校 訓導兼校長を退職。二本松町に移る。

●日露戦争勃発～ミリアムとの結婚・死別

1904	明治37	31歳	**2月10日 日露国交断絶。日露戦争勃発（～1905）** 夏まで米国各地で講演し、論文を発表して戦争の原因を説き、ついで 11月『THE RUSSO-JAPANESE CONFLICT』を英米において刊行し、日本の正義を英米国民に説く。
1905	明治38	32歳	8月 日本側オブザーヴァーとしてポーツマスに2週間滞在し、日露講和会議の推移を見守り、その妥結を主張する。 10月13日 クラウンポイントの教会でニューヘイブン市在住のミリアム・J・キャメロン・ディングウォール（1897（明治12）年4月23日生）と結婚し、市内ウィンスロップ通りに新居をもつ。
1906	明治39	33歳	1月 ダートマス大学を辞し、イェール大学図書館及び米国議会図書館より日本における日本関係図書の収集を依頼される。 2月1日 シアトル港で乗船 2月16日 横浜港に到着する。**（第1回帰国）**父正澄は二本松より横浜に出て10年ぶりに朝河と対面する。 2月23日 午後2時12分二本松駅着 9月 早稲田大学 文学部講師となり、英語を担当する。～1907.6月 9月20日 父が腸捻転で急死し、真行寺で葬儀を営み、二本松町向山墓地に埋葬する。 9月30日 父の家を畳んで東京に移り住む。こののち日本の学界との交流と図書の収集に専念する。
1907	明治40	34歳	8月7日 横浜港を出航し、帰米。米国議会図書館に日本書籍9000余冊をもたらし、同館東洋部の中に初めて日本コレクションの基礎を築く。在日中の図書収集に対し文部省など諸官庁並びに東大や諸寺社が協力した。 9月 イェール大学講師となり、日本文化史を担当する。 9月14日 ワシントンの日本大使館において、改めてミリアムとの結婚式を神式であげる。 11月 同大学図書館の東アジアコレクション部長（キュレーター）に就任する。その後40年間その任にある。 11月11日 ミリアムが朝河家に入籍した。

1908	明治41	35歳	
1909	明治42	36歳	6月 実業之日本社から『日本の禍機』を出版し、日本外交の背信を戒め、あわせて日本の愛国教育を批判する。 9月 ウースターのクラーク大学で講演。
1910	明治43	37歳	5月 同大学大学院の日本文化史助教授に任命される。 **8月 日韓併合**
1911	明治44	38歳	5月 腸チフスにかかる。医師と妻の看護により重態を脱し、9月19日までグロスターの保養所にいる。 11月 クラーク大学で講演。
1912	大正元	39歳	
1913	大正2	40歳	2月4日 妻ミリアムがバセドー氏病手術の結果が悪く、死亡。コネティカット州ニューヘイブン市内のエヴァー・グリーン墓地に埋葬される。朝河との間に子どもはなかった。 5月 レーク・モホンクの第19回列国仲裁会議に出席。
1914	大正3	41歳	5月 新首相大隈重信に対し国政参与の希望を述べ、ついで第20回列国仲裁会議に列席。 **7月 第一次世界大戦（～1918）**
1915	大正4	42歳	6月4日 イタリア・フランス・イギリス3国の調査旅行に出発し、カプリ島のダイアナ・ワッツの別荘で一か月間過ごす。 8月 戦時下のパリから坪内逍遥に近況を報告。 9月30日 帰着。
1916	大正5	43歳	

●「入来院文書」研究

1917	大正6	44歳	4月 米国参戦のため軍隊調練を受ける。 6月21日 バンクーバーを発ち、7月5日に横浜港に着く。（**第2回帰国**）日本の中世史研究のため東京帝国大学史料編纂掛に留学す 12月10日 イェール大学総長より留学期間の1年延長を許可する旨の通知が来る。
1918	大正7	45歳	3月27日 慶応義塾大学で日本アジア協会のために講演。 7月15日 奈良・京都など関西方面の調査のため東京を発つ。 11月1日 東京帝国大学から史料編纂補助の辞令を受ける。この年在日アメリカ人ベラ・アーウィンとの交際が始まり、5年間文通を続ける。
1919	大正8	46歳	1月15日 半年間の調査を終え帰京する。 5月13日 九州の調査旅行に出発し、四国・中国を経て九州に入る。 6月8-16日 鹿児島県薩摩郡入来村に滞在し、7月20日に帰京する。 9月13日 横浜港で乗船し、北米シアトル港に向かう。こののち再び故国の土を踏むことはなかった。 10月 帰米。滞日中は研究用務多忙のため、ついに郷里二本松及び立子山には帰省できなかった。
1920	大正9	47歳	**2月 世界恐慌始まる**
1921	大正10	48歳	6月22日 新総長エンジェルの就任式に当たり、野口英世と歓をつくす。これより先、ハドレー総長の任期終了、大学の財政難を考え、坪内逍遥に母校早稲田大学への転職打診を始める。
1922	大正11	49歳	
1923	大正12	50歳	**9月1日 関東大震災** 9月 新年度より新しく欧州中世比較法制史の講義・セミナーを担当する。 9月7日 関東大震災につき駐米日本大使に東大及びその図書館の被災状況の詳報を求める。東大図書館長より詳報があると 10-11月の間米国議会図書館長その他に対し、図書などの寄贈方について努力する。
1924	大正13	51歳	6月 ベラ・アーウィンと再会、求婚するが結実しない。 7月1日 9月下旬までの予定でイタリアへの調査旅行に出発する。この年、『入来文書』の発行元が変わり、原稿の補訂に着手する。
1925	大正14	52歳	10月7日 日本で『入来院文書』の日本文史料の印刷が完成する。
1926	昭和元	53歳	9月 新たにフランス・ドイツ中世比較法制史の講義・セミナーをも担当する。
1928	昭和3	55歳	
1929	昭和4	56歳	5月 『入来文書』が完成し、イェール大学とオックスフォード大学より発行される。
1930	昭和5	57歳	7月 イェール大学の歴史学准教授に昇進する。

●故国への警鐘～日米開戦阻止運動

1931	昭和6	58歳	7月 ダートマス大学より名誉文学博士の称号を贈られる **9月 満州事変勃発**
1932	昭和7	59歳	2月21日 満州事変に対するアメリカ国民の非難を大久保利武に伝える。
1933	昭和8	60歳	**3月 日本、国際連盟を脱退** 7月 歴史学研究員（教授待遇）に配置換えとなる。
1934	昭和9	61歳	夏 日本イェール大学会寄贈の日本古文化資料がイェール大学に到着し、12月 大学図書館333号室に陳列、公開される。この年よりセイブルック・カレッジの準フェロー（評議員）となり、そこに移り住む。
1935	昭和10	62歳	
1936	昭和11	63歳	6月 カリブ海のドミニカ共和国、プエルトルコに旅行する。
1937	昭和12	64歳	**7月 日中戦争（～1945）** 7月 日本人初のイェール大学 歴史学教授に就任する。
1938	昭和13	65歳	3月6日 日本軍の南京での暴挙が武士道に反するとの論難を中桐確太郎に書き送る。
1939	昭和14	66歳	**第二次世界大戦（～1945）** 10月23日 日本の東亜新秩序論の狂想ぶりを村田への手紙で非難する。これらの手紙は村田によって識者たちへ回覧された。
1940	昭和15	67歳	1月13日 井上秀へ日本軍の中国における暴虐行為を報じ、28日に、鳩山一郎に対しても、「新秩序」を批判し、日本は広く自己の客観的な姿を見るよう忠告する。この年、胆嚢と盲腸の手術を受ける。 **9月 日独伊三国軍事同盟条約調印**
1941	昭和16	68歳	1月19日 村田勤へ日独伊三国の敗北を予言する。 **4月18日 日米交渉開始** 10月12日 日本の大改革を金子堅太郎へ要請する。 11月23日 昭和天皇へのルーズベルト大統領親書案を書きおえ、発案者の旧友ラングドン・ウォーナーへ送る。 **12月8日 日米開戦（～1945）** 12月8日 イェール大学総長が日米交戦中の朝河の自由と生活の庇護を約束する。FBIも彼の自由について同様の方針をとる。

●戦時中の暮らし～晩年

1942	昭和17	69歳	3月29日 エリス島抑留を解かれた角田柳作に近況を訊く。 6月 定年を迎え名誉教授に推される。居所をセイブルック・カレッジより大学院棟の9階に移す。蔵書5000冊を同大学図書館に寄贈する。以後「東西法制史」の研究、著述に没頭した。
1943	昭和18	70歳	
1944	昭和19	71歳	10月2日 アーヴィング・フィッシャーに対して、天皇制を弁護しつつ日本の降伏後の民主主義改革を論じ、あわせて将来、日本に大きな発展が来るべきことを明言する。
1945	昭和20	72歳	春 心臓病の治療を受ける。 **8月 広島・長崎に原爆投下　ポツダム宣言を受諾、降伏**
1946	昭和21	73歳	
1947	昭和22	74歳	
1948	昭和23		8月2日 ヴァーモント州ウエスト・ワーズボロの山荘で暑中の研究生活を送るため、ニューヘイブンを発つ。 8月10日 風邪のため医師に会い治癒の診断を得る。 8月11日 早暁、心臓麻痺のため人を呼ばずに死去する。ときに74歳。イェール大学は告別式を挙行し、ニューヘイヴン市グロウヴ・ストリート墓地の大学用地に葬る。歴史学科副科長ハントレー・シンプスン教授が遺産の管理に当たる。